

# 瀬田貞二・詩とファンタジーを繋ぐ「たましい」の児童文学者

町 田 り ん

二十代前半、瀬田貞二は東京帝国大学文学部国文科に在籍し先輩中村草田男創刊の俳誌「成層圏」同人として俳句という詩文学に深く関わった。旧制夜間中学教師、兵役を経て、戦後は33歳で平凡社に入社する頃まで、草田男が新たに創刊した俳誌「萬緑」<sup>1)</sup>を創刊号から編集、寄稿、対談などを通じて携わり、その後も俳句は生涯瀬田の傍らを伴走し続けた。瀬田の子どもの本の仕事には、詩人または詩を重視する文学者としての横顔が小さくはない存在感を放ち続けている。「詩人と庭師のような方向で仕事をしたい」と『落穂ひろい』<sup>2)</sup>序文で述べていた瀬田貞二。二十代で詩人として出発した瀬田は三十代には8年を費やし「児童百科事典」を編纂し、その後63歳で亡くなるまでの30年間、児童文学の世界で膨大な仕事をこなしていく。

1960年代後半から70年代、幼児期から高校まで浦和の瀬田文庫<sup>3)</sup>に通い続けた御茶ノ水女子大学教授の英文学者戸谷陽子<sup>4)</sup>は、瀬田から影響を受けたものがあるとすれば、瀬田が仕事を〈楽しめてしまう〉人だったことだという。意味と意味されているものが教訓めいたものではないもので結ばれている、むしろ楽しんで繋いでしまう感覚がポストモダンのあると、瀬田への敬愛を込めて瀬田を「ルネッサンス人」と呼んでいる。

描かれる物語の世界を質感や音や手触りといった感覚的なところに思い入れ、それを楽しんでしまうという瀬田が生涯大切にしていたものが俳句という詩文学だった。本論は瀬田の様々な仕事の詩的な側面に灯をともしを試みている。瀬田が詩の持つスピリチュアルな要素を自身の仕事の根幹に据えていたことについて、多岐にわたる瀬田の仕事の道程を、幾つかの作品に触れながら時系列に辿ることで導き出したいと考えた。

なおスピリチュアルあるいはスピリチュアリティという言葉については上智大学グリーン・ケア研究所長の宗教学者島蘭進先生の著作を底本としながら論じることを先生にお認めいただき執筆した。

## プロローグ

ファンタジーとはなにか／詩文学とはなにか／  
瀬田貞二の視座／本論のすすめ方

島蘭進<sup>5)</sup>は『現代宗教とスピリチュアリティ』のなかで宗教の世俗化について次のように述べている。

「ある条件の下で、近代化が世俗化をもたらすことは確かである。近代科学に基礎づけられた世俗知識が学校教育で熱心に子どもたちに伝えられ、社会のなかで大きな役割を果たすようになることは、広い範囲の地域で長期的な変化として観察できる事実である。」<sup>6)</sup>

宗教の世俗化は20世紀後半、特に世界三大宗教といわれた救済宗教すなわちキリスト教、

仏教、イスラム教などの伝統的な宗教に則った地域共同体や生活様式が、科学技術の著しい発達とその裏付けとなる科学的、合理的思考の浸透により主として先進国では世界的にその影響力を急速に失いつつあるかのようにみえた。そしてそれは1950～70年代、宗教社会学の分野では最大のトピックであった。

しかし島蘭進はこの時期の宗教の世俗化はある一面を捉えたにすぎず、特に先進国において顕著に見られたスピリチュアリティの興隆<sup>7)</sup>という現象は人間の宗教への回帰であり、宗教の変容した形ではないかと述べている。

その潮流は文学の世界でも明らかであり、欧米を中心に、主として若者に熱狂的に支持されたファンタジーにJ.R.R. トールキン<sup>8)</sup>の『指輪物語』(1954-55)<sup>9)</sup>があった。この物語は多くの人の心を捉え、21世紀の今日まで世界中で3億部以上を売り上げ、2001年～2003年にかけ

て三部作『ロード・オブ・ザ・リング』がピーター・ジャクソン監督によって実写映画化され三作目の『王の帰還』は11部門のオスカーを獲得し全世界で10億ドルの興行収入を獲得している。

『指輪物語』はスピリチュアリティの興隆という現象のなかで個々人の心を捉えた文学といえるのではないだろうか。

本論では『指輪物語』それ自体は扱わず、指輪物語に先んじ、第二次世界大戦前夜にトールキンが自分の子どもたちのために書いたといわれるファンタジー『ホビットの冒険』（初版1937、第二版1951、第三版1966、第四版1978）<sup>10）</sup>と、トールキン没後遺族により出版された、1920年～43年トールキンがクリスマスの度に子どもたちに贈ったプライベートな絵手紙集『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』をそれぞれ第三章と第一章でとり上げる。

#### i. ファンタジーとはなにか

敬虔なカトリック信者であったトールキンは1938年のアンドリュー・ラング記念講演のためのエッセイ<sup>11）</sup>の中で、創造主に似せて創られた（不完全な）人間は、その能力に応じ「空想」し妖精物語を創る。人間の「空想」が創りだす妖精物語をファンタジーといい、ファンタジーが目指すのは妖精の技であるところの enchantment（魅惑的な魔法）である。そして enchantment は人間にとっての芸術の一形式であり、人間の空想が生み出した「準創造の世界」、すなわち創造主が創ったこの世界には及ばない「第二世界」であると述べている。

リリアン・H・スミス<sup>12）</sup>は『児童文学論』<sup>13）</sup>でファンタジーについて次のように述べている。

「詩と同じようにファンタジーは、普遍的真実をとらえようとする時、隠喩という方法を用いる。……つまり、ファンタジーは独創的な想像力から生まれるものであって、その想像力とは私たちが五感で知りうる外界の概念を超え

た、より深い概念を形成する心の働きである。」<sup>14）</sup>

また心理学者であり心理療法家の河合隼雄<sup>15）</sup>はファンタジーについて『ファンタジーを読む』<sup>16）</sup>のなかで次のように述べる。

「ファンタジー文学は空想への逃避ではなく、時に現実への挑戦ですらある。それは妄想とも作り話とも違う。優れたファンタジー文学は、読み手自身のファンタジーを呼び起こし、何らかの課題をもって読み手に挑戦してくる。」

#### ii. 詩文学とはなにか

では先にリリアン・スミスが「詩と同じようにファンタジーは」と述べている「詩」とは何か。C.D.ルイスは『詩をよむ若き人々のために』<sup>17）</sup>で次のように述べている。

「みなさんが旧約聖書をお読みになれば、みなさんはヘブライの予言者たちの多くはほんとに詩人であったことを知るでありましょう。太古の昔から詩と魔術との間にはある密接な関係があったのです。ところでこの関係が断ち切れてしまってからずっとこのちまでも、詩人はなにか超自然的な能力を持っているという漠然とした考えがいつまでも残っていました。」<sup>18）</sup>

#### iii. 瀬田貞二の視座

さてわが国には1965年に『ホビットの冒険』を、1966年に「ナルニア国物語」全7巻を、1972～75年に「指輪物語」全3巻を翻訳し日本に紹介した瀬田貞二という児童文学者がいた。

瀬田はファンタジーや詩についてどのように考えていたのだろうか。瀬田は1975年「こどもの館」1月号連載「夢みる人びと」でトールキンの『ホビットの冒険』を取り上げているが、その中でファンタジーについて次のように述べている。

「ファンタジーという文学形式は、むかしのもっとも主要な表現手段で、吟遊詩人たちも、チューサーも、セルバンテスも、ダンテもラブレも受け継ぎ発展させた方法だったのに、一九世紀のリアリズムが大人の社会でそれを根絶させた。しかし言いたいことを持つ作家は、それによって信念の輝きを得ようとした。ジョージ・マグドナルドやC.S. ルイスは、それを自分の選んだ文学の方法と自覚していた。わが宮沢賢治も、それでしか表現できない文学として、アドレッセンスへ語りかける形式に従った。」

では次に1957年、瀬田が岩波少年文庫の宮澤賢治童話集『セロ弾きのゴーシュ』のあとがきでのべている一文をみてみよう。

「賢治はじっと物事のなかみを考えぬいていきますと、なにかものの精のようなものになっていくような気がします。草でも木でも岩でも、その本筋を抜き出してみても、考えあわせると、生き生きと夢のような、透き通った不思議な世界の一切が、見えない宇宙の滝のようにひとつの方向へ流れていきます。それを賢治は童話の形で書くほかはなかった。」

とのべ、さらに

「童話は独特のロジックでつらぬかれ、はっきりと目に見える特殊世界を形成するもの。ファンタジーの語源は〈見えるようにする〉ことで、……他の方法では達成できない、少なくとも表現できない、この世の凡庸さに隠された神秘ともいうべきものを、明澄な光の中におく特殊な能力が空想であって、詩の持つ不合理の合理と共通した風土がそこにある。(童話、ファンタジーと詩は) それ自体の論理と必然性をもって発展し、……非現実世界のリアリティ、信憑しがたい世界の信憑性の風土にそれらは生きる。」

瀬田貞二の1975年の論考から瀬田が賢治の

童話をファンタジーと位置づけている事がわかるが、すでに18年もさかのぼる1957年の後書きから賢治の童話を「詩の持つ不合理の合理と共通した風土がそこにある」とのべて詩とファンタジーが同じ土壌で育まれていることを示唆している<sup>19)</sup>。

瀬田の仕事を俯瞰すると、ホビット、指輪以外にも優れた海外の絵本の紹介や翻訳や再話など、その仕事量は膨大である。

さらにその仕事の質は1979年に瀬田が亡くなって38年経った2017年現在も、瀬田の著作『落穂ひろい』『児童文学論 瀬田貞二子どもの本評論集』の編集者であった荒木田隆子<sup>20)</sup>が『子どもの本のよあけ 瀬田貞二伝』<sup>21)</sup>を編むほどに、その評価はむしろ年々高まっている。

自ら「詩人と庭師のような方向で仕事をしたい」<sup>22)</sup>と述べていた瀬田は詩人のまなざしで世の中を見つめ、詩人の目を通して児童文学の真質を見極め、瀬田自身の「たましい」のレベルで受け入れることのできる本だけを評価し紹介していった。瀬田はC.D. ルイスの述べる五感を越えた「超自然的な能力」すなわち「たましい」<sup>23)</sup>や「スピリチュアリティ」<sup>24)</sup>とも言い換えることができる能力を用いて仕事に向かっていたのではないのか。

上記の推論をもとに本論は次のようにすすめていく。

## 本論のすすめ方

### 第一章

#### 〈歴史的背景〉

ここではトールキンが『ホビットの冒険』に先んじ1920年より自分の子どもたちに送り続けた“Letters from Father Christmas”『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』の1930年代に書かれた内容に注目する。

世界が戦火に見舞われつつあったこの時代は日本で石井桃子が初めて『熊のプーさん』に出会い翻訳出版を目指していた時期と重なる。トールキンや石井桃子が一人の作家、編集者、翻訳者として、この時代とどう向き合っていた

のかを俯瞰し、そのことが当時まだ十代だった瀬田貞二がやがては二人の先達との「たましい」のつながりに至るまでを確認する。

## 第二章

### 〈草田男から手渡されたもの〉

瀬田の二十代は1936年～46年、日中戦争から太平洋戦争に至る時代に重なる。ここでは瀬田が師事した中村草田男の俳句に視点を移し戦中から戦後の時代背景の中で瀬田貞二が草田男の俳句をどう読み取っていたのかを俳誌「萬緑」の瀬田の論考から考察。さらに同時期の瀬田の歩みと瀬田本人の俳句の背景を読み解きながら「児童百科事典」編纂に至るまでの瀬田の足跡をたどる。

## 第三章

### 〈詩とファンタジーを繋ぐ〉

#### 〈児童文学におけるスピリチュアリティ〉

1979年惜しまれて逝去した瀬田の講演録『幼い子の文学』の「童唄という宝庫」「詩としての童謡」の項を同時代の子どもの本の動向に対比しながらひもとく。そして瀬田が児童文学に求める詩的な要素を『ホビットの冒険』第三章の詩と散文から考察しながら掘り進め本論の結論を導きたい。

以上の三章について考察することにより詩人の心を持つ瀬田貞二という稀有な児童文学者の本質に迫りたい。

## 第一章

1933～34年：“Letters from Father Christmas”『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』/石井桃子と『クマのプーさん』の出会い/1969年：プーさんとナルニア国物語・石井桃子から瀬田貞二へ

### i. “Letters from Father Christmas”

『ファーザー・クリスマス  
サンタクロースからの手紙』

J.R.R. トールキン “Letters from Father Christmas”『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』<sup>25)</sup> はトールキンがサンタクロースになり代わって1920年から43年まで4人の子どもたちにクリスマスに送り続けた絵手紙をまとめたものである。1976年に瀬田貞二の翻訳で絵本『サンタクロースからの手紙』<sup>26)</sup> として邦訳され、その後2006年『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』として手紙の全文を瀬田貞二・田中明子共訳として出版された。子どもたちへの絵手紙は下記のように始まった。

ほっきょくサンタのいえ  
1920 ねん 12 がつ 22 にち

ジョンくんへ

きみは おとうさんに たずねたそうだね。  
わしが どんな かっこうをしてて、どこに  
すんでいるかと。そこで きみの ために わ  
しの すがたと わしの いえを えに かい  
てあげた。だいに にとっておいてくれよ。こ  
れから オックスフォードに でかけるところ  
だ。おもちゃを つめた ふくろを もって  
ね—きみの ぶんも ある。まにあうといいが  
ね。ほっきょくでは こんやは たいそう ゆ  
きが ふっっておる。きみをあいする サンタク  
ロースより

（瀬田貞二訳）

ユーモアと知己に富んだトールキンから子どもたちへの毎年の絵手紙はトールキンの人間性を知るうえで欠かすことができない。

瀬田は絵本『サンタクロースからの手紙』の「あとがき」に次のように述べている。

「とぎれのないクリスマス・レターがここに集められています。これらの粉飾のないプライベートな手紙のつらなりは、また一面トールキンのいう第二世界誕生の消息を伝えてくれる根本資料とも思われます。」





『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』、評論社、2006年、51頁、1932年ゴブリンの洞穴発見

1932年と33年のこのサンタクロースの手紙のなかには1937年に初版を上梓した『ホビットの冒険』で主人公ビルボと旅の仲間のドワーフ小人に敵対するゴブリン小人が初めて登場する。あらすじはこうだ。

1932年、北極点に住むサンタクロースの相棒のシロクマNPB（ノースポールベア）がゴブリンだらけの洞穴で迷子になってしまう。その後サンタの家の地下室にゴブリンが密かに掘り進めた穴があいていて、そこがゴブリンの洞穴に通じていた。NPBは「ゴブリンの臭いがすごくするぞ」という。機械じかけのおもちゃが大好きなゴブリンのせいでホーンビィの鉄道模型<sup>27)</sup>はみんななくなっていたのだ。

サンタクロースは専売特許の緑の光る煙をトンネルに送りこみ、NPBもばかでかいふいで、更にどんどん吹き送った。奴らはキイキイ悲鳴を上げて、トンネルの反対側の（洞穴の方の）口に殺到した。…そこにサンタクロースがノルウェーから呼び寄せた正統の古い家系の赤のノーム（地の精霊）が待ち構え、何百というゴブリンを捕まえ、雪が大嫌いなゴブリンを雪の中に追い出し品物を全部取り返した。

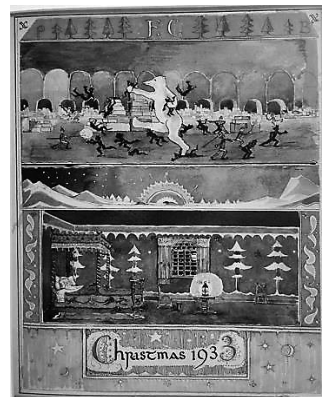
世界中に不況の嵐が吹き荒れていたこの年、トルキン扮するサンタクロースは子どもたち

への手紙の最後で次のように締めくくっている。

「この冬は、あんた方の国にも、他の国にも、お腹をすかせ、寒さにふるえている人が、それはそれはたくさんいるのだよ。」

第二次世界大戦への足音が聞こえる1932年という年は世界のいたるところで戦争にむけ大きく舵が切られた年だった。8月にはドイツ総選挙でナチス党が圧勝し、日本では5.15事件が勃発。首相犬養毅が青年将校によって暗殺された。

さて、サンタクロースの住む北極は翌年さらに大変なことになる。



『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』評論社、2006年、63頁、1933年ゴブリンを蹴散らすNPB、緑と紫の上等なサンタの部屋

1933年にはゴブリンたちが世界中の山々から悪い仲間を呼び集め夏の間に密かに集結し、11月になるとサンタの一番上等の部屋の窓にコウモリに乗ったゴブリンの意地悪そうな小さな顔が見えてサンタを驚かせる。コウモリに乗ったゴブリンは1453年<sup>28)</sup>のゴブリン戦争の時以来見かけなかったからである。それから騒ぎは2週間以上続き、1000匹を超えるゴブリンが襲ってくる。NPBとノーム（地の精）たちが応戦。ゴブリンたちは倉庫の品物の一部に火をつけ、外は月明かりのもとゴブリンたちで真っ黒だった。奴らはトナカイ小屋をこわしてトナカイを連れて逃げた。サンタは金のラッパを吹いて援軍を求め、花火をぶっ放し、エルフ

たちも駆けつけてトナカイたちを助け出す。

トールキンがこれを書いた1933年1月にはドイツでヒトラーがドイツ首相に就任しナチス・ドイツが政権を獲得した。きな臭い現実の世界はサンタクロースの手紙の中のゴブリン騒動を通して詩における隠喩のように「ファンタジー」の形で子どもたちに伝えられた。



『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』評論社、2006年、67頁、1934年氷の上でボクシングパーティーの準備中

## ii. 石井桃子と『クマのプーさん』

トールキンがわが子にサンタクロースの手紙を届けていた1933年、日本では26歳の石井桃子<sup>29)</sup>が前年暗殺された犬養毅の子息犬養健邸で西園寺公一からの贈り物 A.A. ミルン<sup>30)</sup> “The House at Pooh Corner”（『プー横丁にたった家』）に出会い、その場で本に魅せられ何の予備知識もないまま健の子どもたち道子と康彦に「ある日プーは…」と語り始めた。そして「雪やこんこん ぽこぽん」と口ずさむころには、道子はきゃあきゃあ叫び康彦はひっくりかえって転がったという<sup>31)</sup>。

その後教文館で“Winnie-the-Phooh”（『クマのプーさん』）“When We Were Very Young”（『ぼくたちがとても小さかった頃』）“Now We Are Six”（『ぼくたちは六歳』）の原書を見つけ、家庭教師をしていた犬養家の姉弟と、結核で病床にあった親友小里文子のために『クマのプーさん』の翻訳を開始した年でもあった<sup>32)</sup>。



石井桃子訳『熊のプーさん』初版 岩波書店 1940年



石井桃子訳『プー横丁にたった家』初版 岩波書店 1942年

## iii. プーさんとナルニア国物語

石井桃子から瀬田貞二へ

石井桃子は「図書」1969年6月号掲載の「プーと私」のなかで“The House at Pooh Corner”（『プー横丁にたった家』）に初めて出会った時の不思議な体験を語っている。

「その時、私の上に、あとにも先にも味わったことのない、ふしぎなことがおこった。私は、プーという、さし絵で見ると、クマとブタの合の子のように見えるいきものといっしょに、一種、不可思議な世界にはいりこんでいった。それは、ほんとうに、肉体的に感じられたもので、体温とおなじか、それよりちょっとあたたかいもやをかきわけけるような、やわらかいとばりをおしひらくような気もちであった。

ずっとのちに、やはりイギリスのC.S. ルイス作の「ライオンと魔女」という本の冒頭で、ルーシーという女の子が、広壮大なおじさんの屋敷で衣装だんすの中にはいりこみ、そこに下がっている毛皮の外套をかきわけたところ、その先は魔法の国に行ってしまったというところを読んだとき、私は、はじめてプーの話を読んだ時のことを思いだした。ふしぎな世界へつき

ぬける時、くぐりぬけるのは、肌につめたかったり、かたかったりするより、何かもやもやとした、やわらかいものなのだろうか。」

石井桃子は、「体温とおなじか、それよりちょっとあたたかいもやをかきわけのような、やわらかいとばりをおしひらくような気もち」であったとのべ、同じような感覚を「ナルニア国物語」の冒頭にも感じたという。

「もやもやとしたやわらかいもの」とは石井にとって、それが一瞬にして石井をファンタジーのなかへ連れ出してくれるしかけだったのである。

『ライオンと魔女』（“The Lion the Witch and the Wardrobe”）は1966年に瀬田貞二の翻訳で岩波書店から出版されている。石井桃子がブーを初めて読んだ時と同じような感覚を味わった箇所を瀬田は次のように翻訳している。

「なかをのぞくと、外套がいくつも、つるさがっています。たいていは、長い毛皮外套です。ところで、ルーシィにとって、毛皮のにおいをかいだり、毛皮にさわったりするほどすきなことはありませんでした。ですからルーシィは、すぐさま、衣装だんすのなかにはいって、外套のあいだにわりこむと、毛皮に顔をすりつけました。……ルーシィはすぐに、もうすこしなかにふみこみました。すると、はじめの一列のうしろに、二列めの外套がぶらさがっているのがわかりました。二列めは、もうまっくらなものですから、ルーシィはその先のたんすのうしろがわに、おでこをぶつけないように、手をのばしておきました。そして、もうひと足ふみこみ、——さらに二足三足、なかへはいりました。きっと指さきが、うしろの板じきりにさわる、と思ったのですが……さわりませんでした。

「すぐく大きなたんすなんだわ、きつと。」とルーシィは思っ、もっとおくへからだをおし入れるために、外套のやわらかなかたまりをかきわけていきました。……

そのとたんに、顔と手にさわったものは、もうやわらかい毛皮ではなくて、ごつごつして、

ちくちくすることに気がつきました。「おや、木の枝のさきみたいだわ!」ルーシィは声をあげていました。そしてその時、前方のあかりを一つ見たのです。……つめたい、ふわふわしたものが、おちてきました。気がつくと、なんと、真夜中の森の中につっ立っていて、足もとには雪がつもり、空から雪がふっていたのです。」<sup>33)</sup>

やわらかい毛皮の感触をたどっていくとその先には「つめたい、ふわふわした」雪が舞い落ちるナルニア国の森があった。

1933年当時、石井桃子と9歳違いの瀬田貞二は16歳。私立開成中学の4年生で翌年東京高等学校に進学するところだった。

それから33年後の1966年、50歳の瀬田貞二はナルニア国物語全冊を翻訳出版し、3年後の69年には62歳の石井桃子に、ナルニア国物語はブーと同じ感覚をもった物語と評される。

竹内美紀<sup>34)</sup>は『石井桃子の翻訳はなぜ子どもをひきつけるのか「声を訳す」文体の秘密』「あとがき」のなかで、石井桃子が戦中、国体に迎合しない文化人たちが未来ある子どもたちのために作った「日本少国民文庫」<sup>35)</sup>の良心ともいべき精神が戦後も引き継がれ、その代表が石井だったと述べている。その石井とともに瀬田は石井とは同志とも言える深く信頼しあう「旅の仲間」として1960年代70年代を歩んでいく<sup>36)</sup>。

## 第二章

1944年～53年/瀬田貞二の戦中戦後-草田男から手渡されたもの/凝視/「萬緑」創刊  
終戦直後/苛立つ人/児童百科事典

### i. 凝視

C.D. ルイスは、詩人はすべての感覚を用い、常に外的世界と自らの内的世界を「凝視」するべき存在であると次のようにのべている。

「詩人は凝視ということをとおして彼の詩的能力を発達させます。つまりそれは、じぶんの外にある世界とじぶんのうちにおこる出来事とをともにじっと見つめること、じぶんのすべての感覚を使用して人生の不思議さと悲しさによるこびを感じることを、またたえず人生の底にかくれている神秘的な地模様をつかもうと努力することです。』<sup>37)</sup>

「凝視」という観点から瀬田の論考では晩年の「萬緑」昭和 52（1977）年 1 月号「草田男と絵画」<sup>38)</sup> に注目したい。

この時 60 歳の瀬田は、若き日の草田男が絵画を愛し、多くの画人との交友のなかから「絵画を呼吸するもののように自然に自在に、自己文学の根に蓄えていたに違いない。」と述べている。

草田男は特にデューラーを好み、デューラーを神のように崇めていた梅原龍三郎のことも慕っていた。瀬田は草田男が絵画を眺める時の「凝視」の凄さを 1944 年のデューラー「騎士と死と悪魔」からの連作 14 句より以下の 2 句を例に紹介している。戦争末期、忍び寄る敗戦の気配を口にこそ出さないが誰もが感じていた時代の句作である。

地の上の 夏山の上 祖国の城  
名を換えよ 騎士と夏山 誰が世ぞ

草田男



デューラー「騎士と死と悪魔」1513 年

これは「崩壊しようとする自己と祖国とに断固固い直そうとする（草田男の）決意」の句であると瀬田はのべている。「騎士と死と悪魔」

から喚起する草田男の冷徹な人間洞察は絵画への「凝視」がもたらしたものであった。瀬田の評は当時を振り返っての若き瀬田自身の決意を草田男の句に託しているようでもある。

瀬田が紹介している草田男の次の句は 1945 年敗戦直前、色の無い街に一個の林檎の赤い色がこれほどまでに鮮烈であった。草田男は時代の色を「凝視」し絵画的に表現している。

林檎与ふ 世に赤をこそ 色と言はめ  
草田男

続けて 1946 年敗戦の翌年の一句。草田男は親友伊丹万作<sup>39)</sup>の死に際しダ・ヴィンチ「受胎告知」に寄せて。敗戦から立ち直っていく時代を映したこれも絵画的な一句である。

白百合や 天使は聖母より 潔し  
草田男



レオナルド・ダ・ヴィンチ 受胎告知 1472-75 年頃

ii. 1944～45 年：戦争末期から終戦へ／  
結婚・復戦・「萬緑」創刊のころ

1944 年当時、瀬田は衛生二等兵として千葉県市川市の国府台陸軍病院（現、国立精神・神経センター国府台病院）に配属されていた。この国府台陸軍病院は一般に軍人で精神に障害を持つもの、召集された知的障碍者でトラブルを起こしたもの、戦地で「戦争神経症」を発症し心を病んだ兵隊たちが入院する拠点病院だった。この時期の瀬田貞二については荒木田隆子『子どもの本のよあけ』のなかで比較的詳しく知ることができる<sup>40)</sup>。

瀬田は病院内でも俳句に詳しい衛生兵として俳句を詠む集まりをつくっていた。のちに仕事を共にする大塚勇三<sup>41)</sup>も一時原因不明の熱で



入院していた。

清水寛<sup>42)</sup>『日本帝国陸軍と精神障害兵士』によるとこの病院には戦地における民間人への加害行為が引き金となって PTSD（当時はヒステリーといわれた）を発症した兵士の例も報告されており、衛生兵として三年間の軍務に就いた二十代の瀬田がこの病院勤務のなかで兵士たちに接していたことはその後の瀬田の生き方に大きな意味を与えたのではないか。

1945年8月15日の敗戦後、瀬田貞二は秋のはじめに同じ国府台陸軍病院で看護婦として勤務していた村松きくよさんの故郷信州まで結婚の申し込みに行きその秋のうちに結婚する。結婚当初二人は練馬の借家に住み瀬田は両国の夜間中学、桂友中学の教師として復職し生活の基盤を築いた。

瀬田は翌46年には草田男『萬緑』創刊に際し編集長を務めることになる。東京帝大独文に在籍していた草田男が一時精神を病み、その後国文に転科し句作を精神の糧にしていたことは有名であった。瀬田と草田男は「萬緑」に先じる俳誌「成層圏」のころからの同人であり、「萬緑」創刊時には草田男とは家族ぐるみの付き合いだったという<sup>43)</sup>。

この時期の瀬田の一句。もう空襲に怯えることのない静かな月夜。湯屋の煙に人々のいとなみが感じられる。

湯屋の煙 上るその他は 黍月夜  
余寧金之助（瀬田貞二）

この句を受け、後になって瀬田が夫人のきくよさんとともに選んだ句がある。

髪梳くや 麦の穂鳴りに 雲来る  
きくよ

これは1978年瀬田が亡くなる一年前に庭に咲く花を集めて和紙に染めたものに、夫婦でこれまで詠んだ句を五句選び交互に載せた私家版の小さな句集があり、そこに載せた一句であった<sup>44)</sup>。

二人の句を並べてみると、瀬田が市井の人のいとなみを愛しんでいたことが一層伝わってくる。

また瀬田はこの終戦後のごく早い時期に夜間中学の生徒をモデルにした「郵便机」<sup>45)</sup>という一編の童話を書いていた。それが後に中央公論の雑誌「少年少女」<sup>46)</sup>に掲載され、「夜間中学」<sup>47)</sup>という映画になっている。

その後瀬田は学制改革<sup>48)</sup>によって旧制中学が新制高校に移行する直前に中学教師を辞し、並々ならぬ決意をもって在野の児童文学者として歩き出す<sup>49)</sup>。

戦中戦後の非常時、国の存亡が危ぶまれた時期に精神を病んだ傷病兵に寄り添い、多感な働く少年たちの教師をしていた経験が瀬田の心に深く刻まれていたことはおそらく間違いないだろう。そして「草田男と絵画」からも解るように瀬田は晩年に至るまで草田男を詩人として敬愛し続けた。

### iii. 苛立つ人

1985年、季刊「幻想文学」第12号「回想の瀬田貞二」で当時の福音館書店編集者斎藤惇夫<sup>50)</sup>と菅原啓州<sup>ひろくに(51)</sup>が対談し、菅原啓州は次のように述べていた。

「瀬田さんという方は、そういう子どもたちへの思いの一方で、戦争中から戦後にいたる現実の世の中について、非常に強い苛立ちを感じていたと思うんです。子どもの絵本を紹介なさる、昔話を再話なさる、ファンタジーを翻訳なさるといって、なんとなく人あたりのいい好々爺のイメージがあるけれど、実際はむしろ“苛立った人”だったんじゃないかしらね。

短気、苛立つ人。だけどそれを強い言葉で、たとえばこの現実の世界にたいする絶望と、ファンタジーの世界への憧れと、みたいな言い方をしたのは、ちょっとちがってくる。ある気分というか、気質というか、この世界で肌合いをざらさらさせるようなことについての、かなりつよい苛立ち—まあ強い言葉でいえば絶望

ということになるのでしょうか……。

いやな感じ、というものと、自分の世界をのびやかに広げてくれる、あるいは自分が共有できる世界への思いというものは一対<sup>セツト</sup>になっていると思います。

いってみれば歴史的な世界というのは、そういう肌をざらつかせる部分が全部スッと落ちて、そして落ちきったものの中からすくいだされた世界ですよ。

これは瀬田さんだけの方法ではなくて、歴史的な構想力を働かせる作業というのはいつでもそういう部分を持っているわけですが、そういうものから、やっぱり子どもへの思い、確実に今と断絶している失われた時代（を瀬田さんはすくいだしていた）。で、さらにそこから今所有していないものを、どんどん手に入れていこうとしている年頃にある子どもたち（に届ける）、というものへはごく自然につながるんじゃないかという感じがします。』<sup>52)</sup>

同じ対談のなかで両者は瀬田の最も印象に残っているエピソードを掲げている。

斎藤「（菅原と）二人でお宅に伺ったときに奥様が夕食をだしてくださいましてね。ぼくらがホイホイいただいたんですけど、たまたま話題が戦争中のことになったら、突如、ぼくらの前で茫々と涙を流されて、こっちはなにか失礼なことを申し上げたんじゃないかと緊張しちゃって、それが十分たっても三十分たっても止まらないんですよ。どうしようかと思ってオロオロしてましたらね、奥様がおいでになって“実は”ってことで。高校時代の親友だった有坂さんという方が戦死なさっていらっしゃるんですよ。その方と一緒にあちこち歩かれた若い日の思い出が急に蘇ってきたらしくて……あのときは本当にこちらもうろたえましたね。

だから戦争ということに対しても、現代社会に対しても、直接的に言挙して何かを言ったりするんじゃないくて、そういうふうなところで突然噴出してくる……』<sup>53)</sup>

菅原「あのとき、あの人がこの場所で何をし

ていて……というところからワッと出てくる。

瀬田さんが病院でお作りになった俳句があるでしょう、あの中に

啄木鳥女<sup>きつつきめ</sup>ら パラソルで乗る 駝鳥カー  
余寧金之助（瀬田貞二）

という句があるけれど“啄木鳥女ら”って言葉にはものすごく激しい苛立ちというか、こちらが虚を突かれてうろたえるくらいきつい反発がこめられている。だけどそういう思いを現代の社会はかくかくだからかくかくでというふうには絶対おっしゃらない。』

斎藤「俳句で思い出したけれど、辞世の句に

螢放生 この世とあの世の 境閻  
余寧金之助（瀬田貞二）

というのがあって、あれはやっぱり瀬田さんが終生もっていらした思い—それこそファンタジーもそうなんだろうし、この世に対してということもあったろうし、そういう思いのたけがこめられた実に見事な遺詠だったと僕は思っているんです。』

次の句は「萬緑」1953年に掲載され、晩年の夫妻のアンソロジーにも選んだ句である。瀬田は1949年より平凡社『児童百科事典』の編集長としてこの事典の編集に没頭していた。

裸木の 囲む室あり 仕事成れよ  
余寧金之助（瀬田貞二）

次はこの句と対に妻のきくよさんと選んだ一句。

川鳴りの かすかな宵の 炬燵かな  
きくよ

仕事に没頭する夫とその妻のたおやかな信頼が胸を打つ。

瀬田自身の「苛立ち」は時代に対する瀬田の

「凝視」がもたらしたものであったかもしれない。それは俳句の本質にも呼応する。瀬田は1950年代のこの時期『児童百科事典』の編纂をつうじて自身のすべてをこれからの子どもたちの方向に傾ける只中にあった。

### 第三章

1970年代:『幼い子の文学』/同時代の動きと『幼い子の文学』・詩人谷川俊太郎と繋ぐ人瀬田貞二/『ホビットの冒険』/詩とファンタジーとスビリチュアリティ・エピローグにかえて

#### 1. 『幼い子の文学』

瀬田貞二の『幼い子の文学』は「行きて帰るし物語」「なぞなぞの魅力」「童唄という宝庫」「詩としての童謡」「幼年童話の源流」「幼年童話の展開」の六章で構成されている。1976年6月から都立日比谷図書館の児童図書館員講座で二十数名の図書館員にむけて月一回1977年1月まで続けられたものを、1979年8月21日に瀬田が亡くなったのちに、講座の速記録、テープ、遺されたノートを頼りに齋藤惇夫、菅原啓州らが編集し1980年1月25日中央公論社から中公新書として出版された。

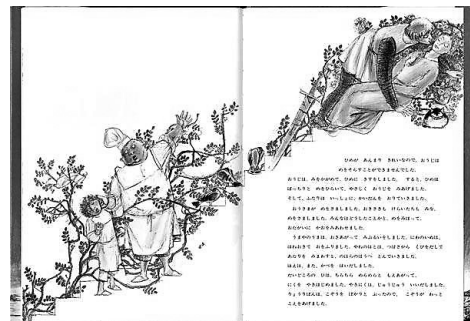
この本の「童唄という宝庫」「詩としての童謡」では瀬田は子どものための詩のアンソロジーを編むためのエスキースと言っても良いほど様々なわらべ歌や詩を紹介している。

#### i. 同時代の動きと『幼い子の文学』 ・詩人谷川俊太郎と繋ぐ人瀬田貞二

平凡社「児童百科事典」を上梓し終えた後1960年代～1970年代「私はむなしいことは嫌いです。」とのべた瀬田貞二は詩人の心でファンタジーの大著や絵本の翻訳、昔話の再話の仕事を続けていく。1960年代の瀬田貞二の翻訳と再話、評論の主なものは以下のとおりである。

(注:出版社の記載のないものはすべて福音館書店)

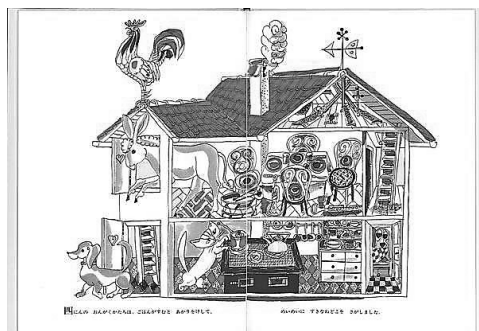
- 1960 絵本『おだんごぱん』  
(ロシア民話 井上洋介絵 こどものとも 47)  
『子どもと文学』(石井桃子他共著 中央公論社)  
絵本『三びきのこぶた』  
(イギリス昔話 山田三郎絵 こどものとも 50)  
『オタバリの少年探偵たち』  
(C.D. ルイス作 岩波少年文庫)
- 1961 絵本『かさじぞう』  
(日本の昔話 赤羽末吉絵 こどものとも 58)  
絵本『七ひきのこやぎ』  
(グリム昔話 山田三郎絵 こどものとも 62)  
絵本『3びきのくま』  
(トルストイ作 山田三郎絵 こどものとも 66)
- 1962 絵本『あふりかのたいこ』  
(瀬田貞二作 寺島龍一絵 こどものとも 77)
- 1963 絵本『チムとゆうかなせんちょうさん』  
(E.アーディゾーニ作)  
『かぎのない箱 フィンランドのたのしいお話』  
(J.C. ボウマン作 寺島龍一絵 岩波おはなしの本)
- 1964 絵本『ねむりひめ』  
(フェリックス・ホフマン絵)



#### 『児童文学論』

(リリアン・H・スミス著 石井桃子、渡辺茂男共訳、岩波書店)

絵本『ブレーメンのおんがくたい』  
（グリム昔話 ハンス・フィッシャー絵）



絵本『うみからきたちいさなひと』  
（寺島龍一絵 こどものとも 103）

1965 『あおい目のこねこ』

（マチャーセン作）

絵本『三びきのやぎのがらがらどん』  
（ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン絵）

『ホビットの冒険』

（J.R.R. トールキン作 寺島龍一絵 岩波おはなしの本）



1966 ナルニア国物語全 7 巻

『ライオンと魔女』『カスピアン王子のつ  
のぶえ』『朝びらき丸東の海へ』『魔術師  
のおい』『銀のいす』『馬と少年』『さい  
ごの戦い』

（C.S. ルイス作 P. ペインズ絵 岩波お  
はなしの本）



1967 絵本『おおかみと七ひきのこやぎ』  
（グリム昔話 フェリクス・ホフマン絵）  
『人形の家』

（R. ゴッデン作 堀内誠一絵 岩波おは  
なしの本）

1968 絵本『うみをわたったしろうさぎ』  
（日本神話 瀬川康男絵 こどものとも  
142）

『まぼろしのこどもたち』

（L.M. ボストン作 堀内誠一絵 学習研  
究社）

1969 『白いシカ』

（ケイト・セレディ作 岩波おはなしの  
本）

絵本『名馬キャリコ』

（バージニア・リー・バートン作 岩波  
書店）

1970 絵本『ながいかみのラプンツェル』

（グリム昔話 フェリクス・ホフマン絵）

1971 絵本『七わのからす』

（グリム昔話 フェリクス・ホフマン絵）

1972-76 指輪物語全 6 冊

『旅の仲間』上下 『二つの塔』上下

『王の帰還』上下

（J.R.R. トールキン作 寺島龍一絵 評  
論社）

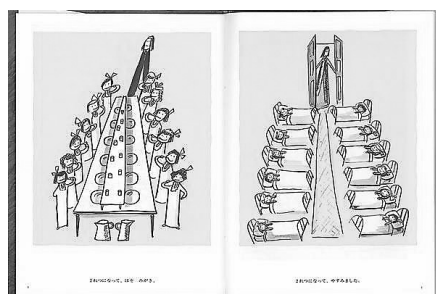
1972 「母の友」豆本付録

絵本『ちっちゃな ちっちゃな ものが  
たり』

（ジェウコブスのイギリス昔話 瀬川康  
男絵）

絵本『げんきなマドレーヌ』

（L. ベーメルマンズ作）



1973 絵本『マドレーヌと犬』『マドレーヌと



- ジプシー』『マドレーヌといたずらっこ』  
(L. ベーメルマンズ作)  
絵本『まのいいりょうし』  
(日本の昔話 赤羽末吉絵 こどものとも増刊号)
- 1974 絵本『アンガスとあひる』『アンガスとねこ』『まいごのアンガス』  
(M. フラッグ作)
- 1975 絵本『ロバのシルベスターとまほうのこいし』  
(W. スタイグ作 評論社)
- 1976 『十二人の絵本作家たち』  
(瀬田貞二著 すばる書房)  
絵本『しあわせハンス』  
(グリム昔話 フェリクス・ホフマン絵)  
絵本『ねずみとくじら』  
(W. スタイグ作 評論社)  
絵本『サンタクロースからの手紙』  
(J.R.R. トールキン作 評論社)
- 1977 絵本『よあけ』  
(ユリ・シュルヴィッツ作)



- 『お父さんのラッパばなし』  
(瀬田貞二作 堀内誠一絵 創作童話シリーズ)
- 1978 絵本『ひよこのかずはかぞえるな』  
(イングリ & ドーレア夫妻作)
- 1979 絵本『チムともだちをたすける』  
(E. アーディゾーニ作)  
絵本『きょうはなんのひ?』



- (瀬田貞二文 林明子絵)  
絵本『おやすみなさいおつきさま』  
(マーガレット・ワイズブラウン作 評論社)



一方「私はあえて詩人の怠惰を責めたい。実際に、1956年の日本で、詩を書いて食っている詩人はいない。しかし、だからといって、それが詩を孤立させていい理由にはならない。我々は詩が売れるように努力すべきである。」<sup>54)</sup> とのべて詩人として独自の道を歩いていた若き谷川俊太郎<sup>55)</sup> がいた。

1969年、詩人谷川俊太郎はスノーピーで有名なマンガ「ピーナッツ」シリーズやレオ・レオーニ『スイミー』の翻訳を開始し、70年からは福音館書店の雑誌「母の友」で「私のことばあそびうた」の連載が始まっていた。谷川の70～80年代の主な絵本と子どもの本の仕事を掲げてみよう。

- 1972 絵本『こっぷ』  
(今村昌明・写真 福音館書店)



1973 絵本『ことばあそびうた』  
(瀬川康男・絵 福音館書店)



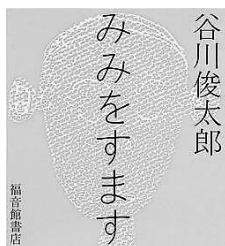
1975 『マザー・グースのうた 1・2・3』  
(堀内誠一・絵 草思社)

1976 絵本『わたし』  
(長新太・絵 福音館書店)  
『マザー・グースのうた 4・5』  
(堀内誠一・絵 草思社)

1979 『にほんご』  
(大岡信、松居直、安野光雅 共著 福音館書店)

絵本『これはのみのびこ』  
(和田誠・絵 サンリード)

1982 ひらがな詩集『みみをすます』  
(柳生弦一郎・絵 福音館書店)



1985 雑誌「たくさんのふしぎ」創刊号  
『いっぼんの鉛筆のむこうに』

(堀内誠一・絵)



谷川は絵本のジャンルでも詩人として創作や翻訳に携わり目覚ましい活躍を始めていた<sup>56)</sup>。

谷川と瀬田は15歳違いであるが、この時期の谷川の子どもの本の仕事にはいわゆる瀬田貞二を慕って「瀬田学校」の生徒と称し浦和の瀬田の自宅に通いつめていた瀬川康男、堀内誠一らが谷川とコンビを組み今も読み継がれる『ことばあそびうた』『マザー・グースのうた』『いっぼんの鉛筆のむこうに』といったロングセラーの絵本を創作した。1970年代～80年代は谷川俊太郎という詩人が詩という枠から抜け出し、子どもの本に深く関わるようになっていた。

そして瀬田貞二は『指輪物語』の翻訳に並行しながら、「母の友」付録としてジェイコブスによるイギリスの昔話『ちっちゃなちっちゃなものごたがり』を瀬川康男の絵で再話し、現在でもロングセラーを続ける「げんきなマドレーヌ」のシリーズや「アンガス」シリーズも翌年にかけて翻訳、77年にはユリ・シュルヴィッツ『よあけ』を翻訳している。谷川と瀬田は非常に近いところで仕事をしていた。

しかしながら瀬田貞二は『幼い子の文学』『詩としての童謡』でも同時代の詩人ではまど・みちおと中川李枝子の詩を取り上げ、むしろ活躍がめざましい谷川のことは『マザー・グースうたのほん』の谷川の翻訳について、

「谷川俊太郎さんの訳も、かなり音が整えてあるんですけれどね」<sup>57)</sup>

と僅かに言及しているのみである。

谷川の翻訳は母音の「う」で韻をふみ原文のリズムの愉しさを日本語で伝え秀逸である。

One, two  
Buckle my shoe ;  
Three, four,  
Knock at the door. . .

ひとつ ふたつ  
はこうよ おくつ  
みつ よつ  
コツコツ ノック……

(谷川俊太郎訳)

『幼い子の文学』『童唄という宝庫』の終わりでは童唄の絵本のあり方として瀬田は次のように述べている。この一文には穏やかな文体の中にも前章 i の「凝視」、iii における「苛立つ人」の側面が表れている。

「近ごろみなさんがマザー・グースを訳すようになって、童唄といえばマザー・グース一辺倒みたいな感じになっちゃいましたけれども、じつは、いろいろなマザー・グースがある、というより童唄があるので、そういうのをあれこれ見るにつけても、私たちの祖先が育ててきた日本の童唄を顧みなくなってしまうというようなことはぜひしないで、なんとか大切に保存していきたいと思います。

私は童唄を保存し、普及させるのには三つの段階があると考えています。まず第一に、学問的な集大成がなくちゃならない。次に、大人向けのいい選択の童唄集が出て欲しいと思います。そして三つ目に、そういうものを経て子ども向けの絵本が作られれば、これはいいものがこしらえられると思うのです。

日本では最初の学問的集成というのがまだ十分ではないので、その点、ちょっとくやしい思いがしますね。」<sup>58)</sup>

瀬田はイギリスの童話研究の礎石として

ジェイムス・ハリウェル『民謡と童唄』  
"Popular Rhymes and Nursery Tales" (1849)  
オビー夫妻『オクスフォード童唄事典』  
"The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes"  
(1951)

をきっかけ、大人向けの優れたアンソロジーとして、同じく

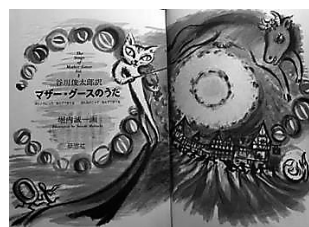
オビー夫妻『オクスフォード童唄集』  
"The Oxford Nursery Rhyme Book" (1955)

があるとし、そういう蓄積があって、はじめて、子ども自身が見る、素敵な絵本としての童唄集が生まれるのではないかと締めくくり、絵本の例として次の二冊を紹介している。

ランドルフ・コールデコット絵 "Hey, Diddle Diddle" (1870 年代)

レイモンド・ブリッグス絵『マザー・グース珠玉集』 "The Mother Goose Treasury"

ちなみに谷川俊太郎は堀内誠一のイラストレーションで先に述べた『マザー・グースのうた』第1集～第5集を75年～76年にかけて出したばかりだったのだから、尚更瀬田の言葉には厳しさを感じるのである。



『マザー・グースのうた 1』(堀内誠一・絵 草思社) 1975

また瀬田は「詩としての童謡」のなかで

「われわれは当たり前人間には見えない、ある深いものを詩人が発見し、それを言葉の業を通して指し示してくれるもの、それが詩だという根本を、もう一度確認しなければいけない

状況に、いまはなっているように思います。』<sup>59)</sup>

とのべ4冊のイギリスの優れた詩集を紹介した。

- 1 クリスティナ・ロセッティ『シング・ソング』  
“Sing-song” (1872)
- 2 R.L. スティーブンソン『子どものための詩の花園』  
“A Child’s Garden of Verses” (1885)
- 3 ウォルター・デ・ラ・メア『ピーコック・パイ』  
“Peacock Pie” (1913)
- 4 ハーバート・リード『楽しい道』  
“This Way Delight” (1957)

さらに自身の「詩の帳面」の三冊から以下の17編の英詩と11編の日本の詩を紹介している。

因みにこれらの『幼い子の文学』に掲載したアンソロジーをもとに四半世紀後の2002年4月と10月、田中和雄<sup>60)</sup>の編集によって『幼い子の詩集 パタポン1』『幼い子の詩集 パタポン2』が出版された。

以下の※は『幼い子の詩集 パタポン1』、※※は『幼い子の詩集 パタポン2』所収。

#### 英詩

- 1 エドワード・トマス  
「アドレストロープ」※
- 2 ウィリアム・アリンガム  
「思い出」※
- 3 ロバート・フロスト（米）  
「牧場」阿部知二訳 ※
- 4 デイビッド・マッコード（米）  
「親父と僕が森の中で」※※
- 5 ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ（米）  
「詩」片桐ユズル訳
- 6 カール・サンドバーグ（米）  
「きり」村野四郎訳
- 7 ウォルター・デ・ラ・メア  
「だれかが」※  
「秘密の歌」

- 「深く澄んだ目が二つ」※  
「おとむらい」西条八十訳
- 11 クリスティナ・ロセッティ  
「ボートは川を走っていく」石井桃子訳  
※※  
「風」西条八十訳  
「重いのはなかに……」
  - 14 エリノア・ファージョン  
「夜はとどまってはくれない」  
「詩」  
「あたしは馬を売らなきゃなんない」※
  - 17 R.L. スティーブンソン  
「雨」

日本の詩で英詩に影響を受けたと感ぜられる詩

- 1 与田準一  
「風がそういった」※※  
「影」※

日本の童謡から

- 3 与田準一  
「谷間」
- 4 丸山薫  
「じゃがいも」
- 5 真田亀久代  
「コップの歌」※※
- 6 大木実  
「雨の田舎町」  
「あしおと」※
- 8 清水たみ子  
「木」※
- 9 中川李枝子  
「てをつなごう」※
- 10 まど・みちお  
「にじ」※  
「かいだん」

エドワード・リアを愛し「ことばあそび」をとおしてナンセンスの詩を自身も編み、ポップで軽妙、清潔な詩の世界で多くの愛読者を獲得してきた詩人谷川俊太郎は、繰り返しになるが1970年代瀬田貞二にとっても近いところで仕事をしている。

一方俳句という詩文学を自身の仕事の礎とし



てきた瀬田はこの時期膨大な仕事をこなしてはいたが、翻訳と再話による瀬田の仕事は谷川ほどには表向きは目立たない。しかし瀬田自身が好ましく思いノートに写しとった詩には情景の「凝視」すなわち人の心にもたらすスピリチュアルな瞬間を捉えたものが少なくない。

谷川の子どもの本の仕事が彼の才能によって花開いたとすれば瀬田の仕事はその花のたねが育つ沃土を作った人。谷川が類稀な楽器を奏でる演奏者なら瀬田はその演奏を美しいと感じる子どもをはぐくむ環境をいつも気にかけていた人。双方は交わることがなかったけれど思いがけず近くにおいて夫々の仕事に没頭していた。

## 2. 『ホビットの冒険』

『ホビットの冒険』から『指輪物語』に至るトルキンの物語世界「中つ国」の創造についてはそれが精緻を極めたトルキンの述べるところの〈妖精の技〉<sup>エルフ</sup>による「第二世界」であるために、今日多くの研究書や解説、論文がある。

ここでは一章で取り上げた『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』とともに、第一次大戦の負傷と親友の死を経験したのちに、言語学に打ち込み、初恋の人と結ばれ、穏やかな暮らしを確立したトルキンが、4人の子どもたちに話して聞かせた物語『ホビットの冒険』を1961年に初めて日本に紹介した瀬田貞二が、この物語をどう位置づけていたのかを考察する。

### i. この物語を形作るもの／言語学／戦争

『ホビットの冒険』には古い時代の伝承の物語の要素と20世紀のイングランド人の要素が混じり合っている。その二つの側面についてトム・シッピー<sup>61)</sup>は次のように述べている。

「『ホビットの冒険』には二つの側面があることは、極めて明白である。片側には、現代中流階級のイングランド人ビルボがいる。反対側には、民間伝承やその祖先たる英雄たちの高尙な

文学が背後に広がる、いにしえの世界がある。」<sup>62)</sup>

ハンカチを持たずに出かけることなど出来ないと考えるイングランド的常識ある者として描かれる主人公ビルボと小人族ホビット。そのホビット族のなかでもバギンズ一族はホビットのなかのホビット（イングランドのなかのイングランド）気質を有した押しも押されぬ名家だった。しかしビルボ・バギンズは、彼の母親トック家の血筋の中に「妖精小人」と結婚したホビットがおり、その血筋がビルボの中に潜む「冒険心」を呼び覚ます。ビルボは結局ホビット的（イングランド的）常識ある日常に後ろ髪を引かれつつ、半ば嫌々ながら魔法使いガンダルフと14人のドワーフ小人たちとともに危険極まりない宝探しの旅に出立する。

この物語の登場人物たち、ホビット小人、魔法使いガンダルフ、ドワーフ小人、エルフ、ゴブリンのルーツを辿ると、ドイツのグリム兄弟、ノルウェーのアスビヨルンセンとモー、フランスのペロー、イングランドのジョセフ・ジェイコブスらの民話集、民話の発想から物語を紡いだデンマークのアンデルセン童話、アンドルー・ラング「色」の童話集、ヴィクトリア朝の多くの神話・伝説入門書などが下地にあることが解る。

例えばドワーフ小人はグリムの「白雪姫」、エルフは「小人とくつや」の妖精、トロールは「三びきのやぎのがらがらどん」の谷川の化身、ゴブリンはジョージ・マグドナルドの物語から、という具合である。

しかも古アングロ・サクソン語を専門としていたトルキンはさらに時代を遡り「古エッダ」にたどり着く。その中からドワーフたちの名前を引き出し、杖を持つエルフという意味の魔法使いガンダルフを生み出した。

瀬田貞二は次のように述べている。

「古アングロ・サクソン語を中心とする言語学とは彼（トルキン）が恋して浄化し、浄化された乙女のようなもの。この人（トルキン）

にとって言語は、単なる採集標本ではなく、生きた伝承形態であり、ある民族の生活と感情、地歴天文と自然観、知恵とモラルの総体を指した。ある時ウェールズの一地方に旅して、かの地名の音の美しさに魅され、のちにそれを中核にしてエルフ語の体系を考案したという。』<sup>63)</sup>

さらに瀬田は、トールキンが第一次世界大戦に従軍して負傷し親友を亡くし受けたトラウマと妖精物語を創造することの関連について言及している。

「他の人の記憶によると、教授はガウンをひらめかしながら教室を行きつ戻りつ、吟遊詩人がどのように歌ったか（と考えるか）を実演、朗読してくれたという。トールキン教授は、シングルトやニャルの世界に住み、アーサー王の時代に生きた。

その人の戦争体験は重かったと思われる。言語学に熱中し、それを通して妖精物語の魅惑にひかれたのは、陸軍病院でだったし、さらにいえば、平和を願い、戦争の根を断つ望みを一生持ち続けたことが、ファンタジーのモチーフとなり、戦場の悲惨と栄光がリアリティとして生かされた点を考えてもそれはわかる。しかし一層根本的なのは、彼が〈エルフの技〉とよぶファンタジーの心象世界のおどろくべき澄明さ、素朴さをつかむのに、戦火をかいくぐる時期が必要だったろうということである。』<sup>64)</sup>

瀬田の述べる「〈エルフ（妖精）の技〉とよぶファンタジーの心象世界のおどろくべき澄明さ、素朴さをつかむのに、戦火をかいくぐる時期が必要だった。」とはどういうことなのか。

20世紀の文学者たちには二つの世界大戦で目の当たりにした「悪」というものに対して、それを心底経験したからこそ表現し得たものがあつた。

『ホビットの冒険』に続く『指輪物語』の神話的世界を創造することは、これまで出会ったことのない巨大な「悪」にたいしてトールキン自身の〈<sup>エルフ</sup>妖精の技〉で応じることだった。と

時に瀬田貞二は前章で述べた戦中戦後の経験を経たものとしてトールキンの精神に深く共感していた。

同時に言語学を極め、その作中に数多くの詩を挿入したトールキンの吟遊詩人的な詩への情熱にも、瀬田は詩人の「たましい」で深く共感していた。

## ii. 『ホビットの冒険』第3章を読む／ エルフの歌

『ホビットの冒険』を読み込むとき 文章表現での直喩、隠喩、詩のなかの押韻、韻律といった表現に注意を払ってみよう。

以下は『ホビットの冒険』第3章、穏やかな休息を求めてエルフの谷へ下るシーン。情景と歌が相まって醸し出す雰囲気そのものに詩情がある。またリズムミカルなエルフの歌にはふんだんに脚韻が用いられている。

The air grew warmer as they got lower, and the smell of the pine-tree him drowsy, so that every now and again he nodded and nearly fell off, or bumped his nose on the pony's neck.

「くだるにつれて、空気はあたたかくなり、マツのにおいがビルボのねむけをさそいましたので、ときどきビルボはこっくりしては、馬から落ちそうになったり、鼻を馬の首にぶついたりしました。

……

The trees changed to beech and oak, and there was a comfortable feeling in the twilight. The last green had almost faded out of the grass, when they came at length to an open glade not far above the banks of the stream.

木々はブナやカシにかわり、たそがれのあかりに、和らいだ気分がただよいます。谷川の岸に近い林の空き地についたころ、草のみどりがみわけられないくらい、暗くなっていました。

“Hmmm! It smells like elves!” thought Bilbo, and he looked up at the stars. They were burning bright and blue. Just then there came a burst of song like laughter in the trees;

「ふーん、エルフたちのにおいだな。」と、ビルボは思いました。そして空を見上げました。星々は、明るく青くかがやいています。その時、とつぜん、林の中から笑い声のように歌がふきだしてきました。

O! What are you doing,

やあ、そこで何をしているの？

And where are you going?

いったい、どこへいきたいの？

Your ponies need shoeing!

小馬のひずめをとりかえなさいな。

The river is flowing!

ほら、川がながれていくだろう、

O!! tra-la-la-lally

トラ、ラ、ラ、ラリー

Here down in the vally!

この谷そこを!

The valley is jolly,

谷はたのしい、

ha! ha!

ハッハッハ!<sup>65)</sup>

ビルボは谷を下りながら〈松の匂いに眠気を誘われて馬から落ちそうになったり〉、〈黄昏時の樫とブナの本立の中で気分が和らいだり〉、〈薄闇の中でエルフの匂いを感じたり〉、〈空を見上げて輝く星々をみたり〉する。そこへ突然〈笑い声のような歌〉が聞こえてくる。

作者はビルボの五感を通して、時系列に穏やかな日暮れの情景を写生しているが、瀬田の翻訳をとおすとそれは一層俳句的な〈暗示〉<sup>66)</sup>となる。そしてその〈暗示〉はトールキンの表現上の〈隠喩〉と共鳴する。

古代のアングロ-サクソン語に精通したトールキンの霊的な感受性にたいし、瀬田もまた詩人の「たましい」で応え翻訳の仕事に向きあっ

ていたことが原文と訳文を精査する中で浮き彫りにされる。瀬田自身はそのことを十分に理解し臨んだ翻訳だった。

瀬田の翻訳はトールキンが含み笑いを浮かべながらこの物語を子どもたちのために書いていたときの、その朗らかな楽しみ…とでも言うべき密かな「遊び心」が乗り移っているかのようだ。

物語の中の詩は物語に登場する者たちが子どもの心に鮮やかに見えるための仕掛けでもあった。

ハーバート・リード<sup>67)</sup>『詩についての八章』<sup>68)</sup>のなかで、吟遊詩人等によって口承された最も古い英詩の特質として「叙述の直接性、リアリズム（具象的な明確性）、感傷の絶無、悲劇的人生観、不自然ではない韻文、本能的で単純な拍子（リズム）を掲げて更に次のように結んでいる。

「かれらの心性は、それ自体、冷酷な自然の猛威にたいする苛烈な闘争により決定された。その罔続する自然の敵意は、人間を不撓不屈の勇敢な行動者に作り上げただけでなく、迷信的で陰鬱な信仰を抱かせた。彼らが直面した風雨は、超自然的な特質を付与され、それは呪術的な儀式によってのみ追い払われた。キリスト教でさえ彼らの陰鬱さを和らげることはできず、むしろこの世の喜びの儚さ、超自然的世界の現実性、原罪（アダムとイヴ）への信仰をとりこみ、彼ら北方民族特有の精神状況を完成させた。こうした精神状況による芸術は逃避の芸術であるが自己欺瞞やごまかしの芸術ではない。踊る群衆、酒気の熱気が満ちた大広間の芸術、うっとりさせる物語、子どもを寝かせる時の子守歌の芸術である。」

本章で取り上げた『幼い子の文学』で瀬田が選んだ英詩、『ホビットの冒険』の〈エルフの唄〉、ひいては瀬田貞二の翻訳と再話の絵本と物語の数々、ジェイコブスによるイギリス昔話『三びきのこぶた』、『ちっちゃな ちっちゃな ものがたり』、グリム昔話『おおかみと七ひきのこ

やぎ』『ねむりひめ』『ブレーメンのおんがくたい』『ラプンツェル』『七つのカラス』、アスピヨルンセンとモーによるノルウェー昔話『三びきのやぎのがらがらどん』、ロシア昔話『おだんごパン』『三びきのくま』、雪深い信州の日本昔話『かさじぞう』。

そして『ナルニア国物語』『ホビットの冒険』『指輪物語』。それらの素材はリードの初期の英詩の解釈にたどり着くことができるものばかりである。

瀬田の物語と絵本の選択眼はハーバード・リード、C.D. ルイスから学び、トルキンにより深められたとあって良いだろう。俳句という日本の詩文学に精通しながらイギリスの詩文学を深く知り、瀬田のファンタジーと詩の持つスピリチュアルな領域にたいする感受性はより研ぎ澄まされ磨かれていった。

### 3. 詩とファンタジーとスピリチュアリティ／エピソードにかえて

プロローグでは、島蘭進が現在のスピリチュアリティは宗教の変容した姿であると論じていることに触れた。文学においては「指輪物語」に代表されるファンタジーもその流れの中で多くの読者を獲得してきた文学と捉え本論をすすめてきた。

島蘭の『現代宗教とスピリチュアリティ』にはポール・ホーケン『イマジン—未来への想像力』<sup>69)</sup>の次の一文が紹介されている。

「私たちは、『バカバット・ギーター（ヒンドゥー教の聖典）や『指輪物語』のような闇と光の織りなす物語に描かれる、ひとつの神話時代にさしかかっている。現代は地球上のあらゆる生命システムが衰退しつつあり、それは経済成長とともに加速している。商業的發展は一見望ましい生活をもたらしてくれるいっぽうで、私たちが大切にしたい地球と生命を破壊している。現在行われている企業活動のもとでは、どの野生生物保護地区も原生自然も先住民文化も、グローバル市場経済を生きのびることはで

きないだろう。私たちは森林や漁場、サンゴ礁、表土、水、生物多様性、安定した気候などを維持できなくなっている。大地と海と大気は、生命維持装置の基盤ではなく廃棄物置場にされてしまった。

（中略）私は雨の訪れ、信じがたい奇跡、地球の反対側まで迷わずたどりつけるアジサシやツバメの知性といったものを信じている。また私たち人類には、すばらしい未来を創造する力があるとも信じている。私たち個々のアメリカ人が、見も知らぬ土地の人々に危害を加えているのは事実とはいえ、同時に一人ひとりの内には希望の種も宿っている<sup>70)</sup>。

島蘭はこれを20世紀最後の四半世紀に登場した環境主義や自然との調和を求めるスピリチュアリティとのべる。スピリチュアリティを、〈宗教を人間の側の特性や経験に即してとらえようとする言葉〉と規定すれば、本論で取り上げてきたファンタジーと詩文学は個々人のスピリチュアリティを喚起する言葉であり物語と考えて良いだろう。

詩もファンタジーもその源流を太古の神話にまで辿ることができるが、ファンタジーが今日のような文学としてのジャンル形成がなされたのはアンデルセン以降である。

トルキンが「第二世界」と述べるファンタジーであるが、それは、

「その世界が目に見えるように破綻なく描きだされていなくてはならず、妖精の持つような技術を必要とする。」<sup>71)</sup>

〈妖精の技<sup>エルフ</sup>〉は芸術の一領域であり、多くの芸術と同じように真贋を見極めなければまがい物を掴まされる世界でもある。瀬田は現代人が書物のみならず様々なメディアから溢れる言葉のなかで真にスピリチュアルな言葉を見出すことができるよう幼い子どもたちに向けて考え続け、発信し続けてきた。

本論は瀬田貞二の1930年代から70年代の40年間の俳句と子どもの本とともに歩んだ道



程を、草田男、トールキン、石井桃子との繋がりをよすがに、俳句、英詩、ファンタジーに潜むスピリチュアリティの存在を探りながらたどってきた。

トム・シッピーは『指輪物語』において最も直に現代に関わってくる二つのテーマ、「悪」と「神話」について次のように述べている。

「繰り返しになるがトールキンは「トラウマを負った作家」グループの一人だと考えて良い。彼らはみな非常に大きな影響力を持ち、その多くはウォーターストーンの人気投票で上位を占め、ファンタジーや寓話を書く傾向があった。このグループには、私が既に挙げたトールキン、オーウェル、ゴールドディング、ヴォネガット以外にも、トールキンの友人でもあった C.S. ルイス、T.H. ホワイト、ジョセフ・ヘラー等が入る。中には、銃撃されたものや（オーウェルとルイスはどちらも戦場で致命傷に近い傷を負った）、爆撃に遇った者がいた（ヴォネガットはドレスデンが破壊されたその夜、爆撃の実際にその場にいた。）アーシュラ・ル・グウィン、似たような直接的な暴力こそ経験していないが、シオドーラ・クロウバーの娘であった。彼女の母親は最終的には全滅してしまうカリフォルニア・インディアンのヤヒ族最後の生き残りである「イシ」について、三つの異なる著作を残した。故にこれらの作家の多くは、二十世紀最悪の恐怖の非常に近くにいたか、あるいは実体験していた。ソンム、ゲルニカ、ベルセン強制収容所、ドレスデン、産業化された戦争、民族大虐殺——どれも以前は無かったし、あり得なかった恐怖だった。」<sup>72)</sup>

トム・シッピーの論考に添っていえば、瀬田貞二も石井桃子もまた、戦争のトラウマを抱えた文学者だった。先の戦争の戦中戦後を詩人の魂で「凝視」していた瀬田貞二。瀬田の仕事には、今だからこそ私たちが学ぶことが数多ある。私たちが子どもたちに手渡すべき本に迷った時、瀬田貞二の翻訳によるデ・ラ・メアの詩を思い出すと良い。

「深く澄んだ目が二つ」その目で見、また耳で聴き、心で深く感じるまで考え続け、瀬田が守りたかった子どもの心に寄り添うことを忘れてはならない。

「僕はこの詩がとっても好きです。人体が有機的に動いている、その生命の働きみたいなものが、ぴしっとつかまえているんですが、詩の本質は生命を把握することにあると定義することだってできるんですからね。」<sup>73)</sup>

瀬田貞二

## TWO DEEP CLEAR EYES

Two deep clear eyes,  
Two ears, a mouth, a nose,  
Ten supple fingers,  
And ten nimble toes,  
Two hands, two feet,  
two arms, two legs.  
And a heart through which  
Love's blessing flows.  
Eyes bid ears  
Hark :  
Ears bid eyes  
Mark :  
Mouth bids nose  
Smell :  
Nose says to mouth,  
I will :  
Heart bids mind  
Wonder :  
Mind bids heart  
Ponder.  
Arms, hands, feet, legs,  
Work, play, stand, walk ;  
And a jimp little tongue in a honey-sweet mouth,  
With rows of teeth due North and South,  
Does nothing but talk, talk, talk.<sup>74)</sup>

「深く澄んだ目が二つ」

深く澄んだ目が二つ  
耳が二つ、口が一つ、鼻が一つ、  
つかむ手の指が十、  
動く足の指が十、  
手が二つ、腕が二つ、  
足が二つ、脚が二つ、  
そして心臓が一つ  
この心臓から愛がほとばしります。  
目が耳にいます  
聞け。  
耳が目にあります  
見よ。  
口が鼻にいます  
かげ。  
鼻が口にいます  
かぎますよ。  
心が頭にいます  
おどろけ。  
頭が心にいます  
考えよ。

腕と手、  
脚と、足は  
働き、遊び、立って歩きます。  
そして 蜜のように甘い口の  
しなやかな小さい舌は、  
南北に歯を立て並べて、  
ひたすらしゃべり、しゃべり、  
しゃべりまくりです。<sup>75)</sup>

ウォルター・デ・ラ・メア  
(瀬田貞二訳)

1) 「萬緑」

中村草田男主宰の俳句同人誌。1946年創刊。  
余寧金之助と瀬田貞二は初代編集長。

2) 瀬田貞二『落穂ひろい 日本の子どもの文化をめぐる人びと』福音館書店、1982年

3) 瀬田文庫

1959年より毎週土曜日、浦和の瀬田邸の前に  
「きょうはほんの日」と開館のお知らせが出る。  
瀬田貞二が亡くなってからもきくよ夫人と娘の充  
子さんにより近所の子どもたちのために現在も続

けられている。

4) 戸谷陽子

御茶ノ水女子大学基礎研究院人文科学系教授。  
舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、  
文化政策、比較演劇論。

5) 島蘭進 1948年生まれ、東京大学文学部宗教学  
科教授を経て、現在、上智大学神学部教授、同大  
学グリーンケア研究所長。専攻は近代日本宗教史、  
比較宗教運動論。

著書に『現代宗教の可能性』『国家神道と日本人』  
『スピリチュアリティの興隆』（岩波書店）『現代  
救済宗教論』（青弓社）『精神世界のゆくえ』『ポ  
ストモダンの新宗教』（東京堂出版）『いのちの始  
まりの生命倫理』（春秋社）、『現代宗教とスピリ  
チュアリティ』（弘文堂）、『物語を宗教でほどこ』  
(NHK出版) 等

6) 島蘭進『現代宗教とスピリチュアリティ』現代社  
会学ライブラリー 8、光文堂、2012年、10～11  
頁「世俗化と新しいスピリチュアリティ」

7) スピリチュアリティの興隆

島蘭進『現代宗教とスピリチュアリティ』現代  
社会学ライブラリー 8、光文堂、2012.12、94頁

「現代世界の思想動向は、2つの変化が複合し  
て起こっていると考えることができる。すなわち  
(1) 世俗主義から宗教への人心の変化、(2) 宗教  
からスピリチュアリティへの強調点の移行、とい  
う二つの変化である。

(中略)

主として先進国で顕著に見られるスピリチュア  
リティの興隆という現象は世界全体の現代的な宗  
教の変容から見れば一部の現象にすぎないという  
ことを強く心に止めた上で、にもかかわらずそれ  
がたいへん重要な変化であることも確かめていき  
たい。

(中略)

私の見るところでは、現代宗教の中で多くの人  
が離れていこうとしているのは、宗教の中でもと  
りわけ救済宗教である。したがって、(2) の変化  
は、むしろ「救済宗教からスピリチュアリティ重  
視の宗教」への変化としたほうが良いと考える。」

8) J.R.R. トールキン John Ronald Reuel Tolkien

トールキンは1892年、南アフリカのブルーム  
フォンテンで、英国人の両親のもとに生まれた。  
ほどなくイギリスに帰国して4歳のときに父を、  
12歳のときにローマ・カトリック信者の母を亡  
くした。トールキンはバーミンガムとその周辺で  
育てられたが、外地生まれでドイツ由来の名を名  
乗っていたにもかかわらず、イングランドのウェ  
スト・ミッドランド地方に自分が深く根ざしてい

ると感じていた。16歳のときに3歳年上の将来の妻と出会う。結局は後見人によって、成人するまで会うことも手紙のやり取りをすることも禁じられてしまうが、21歳のときにプロポーズの手紙を送り、オックスフォード在学中に結婚する。それから間もなく、1915年に大学を卒業すると、ランカシャーフュージャリア連隊に配属される。1916年7月から9月にかけて、ソンムの戦いに歩兵隊所属の少尉として参戦。同じ年、親友二人のうち一人は即死、もう一人は壊疽で死亡。トルキン自身は塹壕熱により傷病兵として送還され、戦後しばらくは『オックスフォード英語大辞典』(OED)の編纂に携わる。リーズ大学で准教授職を得てその後教授になり、1925年にオックスフォード大学のアングロサクソン語教授に就任する。

これから後は「とりたてて何事もなかった」。トルキンは仕事をし、家族を養い、本を書いた。『ホビットの冒険』(1937年)と『指輪物語』三部作(1954~55年)はとりわけ傑作であった。純粋に学術的な方面では、中世ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』の校訂本を1925年に、『ペーオウルフ』についてのブリティッシュ・アカデミー(英国学士会)での講演原稿を1936年に出版した。1959年、オックスフォードでの二つ目の教授職を退官する。(トルキンは1925年弱冠33歳でオックスフォード大学ローリンソン＝ボズワース記念アングロ・サクソン語教授として迎えられ、1945年にアングロ・サクソン語教授からマートン学寮の英語学英文学教授に移った)。生涯を通じてカトリックのキリスト教を信仰し、妻を亡くした二年後の1973年に世を去る。不倫、性的倒錯、スキャンダル、いわれなき告発、政治への関与など、お粗末な伝記作家が食いつくような事件は、ある意味何もなくなかった。しかし、カーペンターも認めているように「何もなくなかった」という要約からこぼれ落ちてしまう内なる人生、精神活動、すなわちトルキンの作品世界があった。それはまた……トルキン自身はこの二つの間に線引きをして区別していなかったが……彼の趣味であり、個人的な楽しみであり、彼を支配する情熱だった。

(トム・シッピー『J.R.R. トルキン世紀の作家』2015年、評論社、10~12頁「トルキンの生涯と作品」の一部を要約)

- 9) John Ronald Reuel Tolkien "The Lord of the Rings" Vol.1 The fellowship of the ring (1954) Vol.2 The two tower (1954) Vol.3 The return of the king (1955)

J.R.R. トルキン『指輪物語』瀬田貞二訳、評論社、1992年

『旅の仲間』『二つの塔』『王の帰還』三部作はすべて世界史上のベストセラーのトップ10に入り、それぞれ1億5500万部、1億5000万部、1億4000万部を売り上げている。『指輪物語』は『ホビットの冒険』の後日談として子ども向けではない本格的なハイファンタジーとして第二次世界大戦中に執筆され大戦後に出版された。指輪の出版に伴い『ホビットの冒険』も度々改訂を繰り返した。

- 10) John Ronald Reuel Tolkien "The Hobbit, or There and Back Again" 1937.9.21  
J.R.R. トルキン『ホビットの冒険』瀬田貞二訳、岩波書店、1965年(岩波の愛蔵版)
- 11) J.R.R. トルキン『妖精物語について ファンタジーの世界』猪熊葉子訳、評論社、2003年
- 12) リリアン・H・スミス Lillian H. Smith 1887-1983 カナダのオンタリオ州ロンドン市に生まれる。トロント大学を卒業。ビッツバークのカーネギー図書館学校で児童図書館員としての訓練を受けたのち、一時ニューヨーク公共図書館児童室で働き、1912年にトロント市公共図書館に招かれて、最初の少年少女部の部長に就任。子どもの読書施設「少年少女の家」の運営、ブックリスト『少年少女のための本』Books for Boys and Girlsの作成など、カナダにおける児童図書館サービスの先駆者として、その業績の重要性は広く認められている。
- 13) リリアン・H・スミス『児童文学論』石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男共訳、岩波書店、1964年  
"THE UNRELUCTANT YEARS" 1953 by American Library Association, Chicago.  
原題は直訳すると『たゆまぬ年々』。
- 14) 同上 304頁
- 15) 河合隼雄 1928年兵庫県生まれ。京都大学理学部卒業。1962年よりユング研究所に留学、ユング派分析家の資格取得。京都大学教授、国際日本文化研究センター所長、文化庁長官を歴任。2007年7月逝去。著書に『コンプレックス』『昔話と日本人の心』『昔話の深層』『未来への記憶』ほか。
- 15) 河合隼雄『ファンタジーを読む』岩波書店、2013年、〈子どもとファンタジーコレクションⅡ〉「児童文学とたましい」
- 17) Cecil Day Lewis "Poetry for you" 1944  
C.D. ルイス『詩をよむ若き人々のために』深瀬基寛訳、筑摩書房(ちくま文庫)、1994年
- 18) 同上 12~13頁
- 19) 瀬田のあとがきにはリリアン・H・スミス『児童

- 文学論』のファンタジーの章からの引用がある。
- 20) 荒木田隆子 元児童書出版社の編集者。在職当時は瀬田貞二氏の担当編集者として『落穂ひろい—日本の子どもの文化をめぐる人びと』『絵本論—瀬田貞二子どもの本の評論集』『児童文学論—瀬田貞二子どもの本評論集』を手がけた。また「日本の昔話」全4冊など、子どもの伝承文化にかかわる本編集の仕事もあり、著書に『鈴木サツ全昔話集』（共著/福音館書店刊）がある。
- 21) 荒木田隆子『子どもの本のよあけ 瀬田貞二伝』、福音館書店、2017年
- 22) 「詩人と庭師のような方向で仕事をしたい」  
瀬田貞二『落穂ひろい』上巻、「はじめに」、1982年、4頁  
「どんな時代にも子どもたちはいましたし、その子たちも、私たちの時代の子らと同じように喜怒哀楽に生きていたにちがいありません。そして彼らにそれを与えたものは、彼らの時代のおとなたちだったことも、たしかです。しかしそのなかで、自分の能力を発揮して、できるだけ純粋に、または積極的に、子どもたちを喜ばせ楽しませたおとなはいなかったかどうかが私の関心事でした。そしてその点を私のせまい探索の道のほりで、ひろいあげようというのが、この「落穂ひろい」の目的にほかなりません。  
……  
（わたしは）子どもの情感、子どもの生活をこまやかに見て、その喜びを喜びとしたような人々の系列、ケストナーの口ぶりを借りていえば、詩人と庭師しか持てないような方法で子どもたちと付き合った者の歴史の方へ、私は近づきたいのです。」
- 23) たましい  
河合隼雄は『ファンタジーを読む』中の「児童文学とたましい」の章で次のように述べている。  
「なぜ児童文学がたましいのことを述べるのに適しているのか。大人はどうしても、この世のシステムや仕組みや、いわゆる常識というものととらわれるので、たましいのことが見えにくい。その点、子どもの目は端的に「たましいの現実」を見る。子どもの目を見た現実がそのまま語られるので、児童文学はたましいのことに深く関係しているのだ。……  
たましいのことについて知るのは、知的ないとなみではなく、自分の存在全体にかかわることである。私は来談したクライアントに向かうように、これらの作品に向かい、自分の存在を揺るがされるような体験を味わう。そのような体験を通してこそ、たましいについて少しずつ「知る」ことが可能となる。そして、それは極めて個別的特殊的でありながら、普遍へとつながってゆく不思議さがある。そのような作業は、何か心理学の一般的なルールがあって、それを作品に「あてはめ」て作品を「解釈」するなどというのとは、まったく異なるものである。」
- 24) スピリチュアリティ  
ファンタジーが語源をたどると「目に見えるようにすること」ということにたいして、スピリチュアリティは「ふいてくる風」という意味を持つ。  
また、島蘭進は『現代宗教とスピリチュアリティ』のなかでスピリチュアリティを、〈宗教を人間の側の特性や経験に即してとらえようとする言葉〉とのべている。
- 25) “The Father Christmas Letters”  
『ファーザー・クリスマス サンタクロースからの手紙』瀬田貞二・田中明子訳、評論社、2006年
- 26) 『サンタクロースからの手紙』瀬田貞二訳、評論社、1976年
- 27) ホーンビー（Hornby, Hornby Hobbies Ltd.）イギリスの鉄道模型ブランド。1933年当時はゼンマイ式のOゲージを発売していた。
- 28) ちなみに1453年は東ローマ帝国滅亡（コンスタンティノープル陥落）英仏百年戦争終結の年であった。
- 29) 石井桃子 1907年、埼玉県浦和市に生まれる。28年日本女子大学校英文学部卒業。文藝春秋、新潮社、岩波書店などで編集に従事。戦後宮城県鶯沢で農業・酪農に従事。その間も上京し、翻訳家、児童文学作家、随筆家として活躍。『ノンちゃん雲に乗る』（47年）などの創作、「クマのプーさん」「ピーターラビット」「うさこちゃん」シリーズの翻訳、自宅の一室に家庭文庫を開く（58年＝のちに公益財団法人東京子ども図書館へ発展）など、その活動は子どもの本の世界を実り豊かなものにした。2008年、101歳で逝去。
- 30) A.A. ミルン（1882-1956）  
イギリスの詩人・劇作家。ロンドン生まれ。ケンブリッジ大学では数学を専攻したが、文筆家になろうという決心は変わらなかった。風刺雑誌「パンチ」の編集助手をつとめ、自らも大いに筆をふるった。代表作『クマのプーさん』（1926）、『プー横丁にたった家』（1928）のほかに、幼い息子を主人公にした二冊の詩集『クリストファー・ロビンのうた』（1924）、『クマのプーさんとぼく』（1927）もよく知られている。さし絵は4冊ともE.H. シェパード。
- 31) 石井桃子「プーと私」、岩波書店「図書」1969年



1月号参照

- 32) 尾崎真理子『ひみつの王国』、石井桃子略年譜、新潮社、2014年、560頁
- 尾崎真理子 宮崎県生まれ。青山学院大学文学部卒業後、読売新聞社に入社。1992年より文化部記者として、文芸月評、作家のインタビュー、連載小説などを担当する。東京本社文化部長を経て編集委員。著書に『現代日本の小説』『大江健三郎 作家自身を語る』（大江氏と共著）、2015年『ひみつの王国 評伝 石井桃子』で芸術選奨文部科学大臣賞、新田次郎賞、同作品を含む活動で2016年度日本記者クラブ賞を受賞した。2017年『詩人なんて呼ばれて』・谷川俊太郎 尾崎真理子共著）を上梓。
- 33) C.S.ルイス『ライオンと魔女』瀬田貞二訳、岩波少年文庫、1985年、14～16頁
- 34) 竹内美紀 東洋大学文学部准教授。1963年神奈川県生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業、財団法人松下政経塾本科終了。2012年よりフェリス学院大学人文科学研究科博士課程満期退学。文学博士。主著『石井桃子の翻訳はなぜ子どもを惹きつけるのか 声を訳す文体の秘密』ミネルヴァ書房、2014年。『ベーシック絵本入門』（共著）ミネルヴァ書房、2013年、『英語圏諸国の児童文学Ⅱ テーマと課題』（共著）日本イギリス児童文学学会編、ミネルヴァ書房、2011年、『英米絵本のベストセラー40—心に残る名作』（共著）灰島かり編著、ミネルヴァ書房、2009年。翻訳 テリ・テリ『スレーテッド』1-3 祥伝社、2017年。
- 35) 「日本少国民文庫」
- 1934年石井桃子は27歳のときに山本有三の誘いで新潮社「日本少国民文庫」の準備にとりかかる。編集部員は吉野源三郎、吉田甲子太郎、高橋健二ら。6月「日本少国民文庫」の編集に参加。編集長は吉野源三郎。1935年11月「日本少国民文庫」刊行開始。1936年6月「日本少国民文庫」新潮社編集部は解散。12月『日本少国民文庫第15巻・世界名作編（2）』（山本有三編）刊行。
- 36) 1955年（瀬田39歳、石井48歳）から月一回の勉強会 ISUMI 会が石井宅で開かれそこで話し合われたことが1960年には『子どもと文学』として中央公論社から出版されている。
- 37) C.D.ルイス『詩を読む若き人々のために』深瀬基寛訳 ちくま文庫 1994年 69頁
- 38) 余寧金之助（瀬田貞二）「草田男と絵画」『萬緑』1977年1月号所収
- 39) 伊丹万作（1900-1946）日本の映画監督。監督作品に『国士無双』シナリオに『無法松の一生』がある。日本のルネ・クレールと言われた。映像美

と社会への鋭い眼差しが特徴。映画監督の伊丹十三は長男。大江健三郎夫人の大江ゆかりは長女。

- 40) 荒木田隆子『子どもの本のよあけ 瀬田貞二伝』福音館書店、2017年、36頁
- 「このころ若い男の人はみんなそうだったのですけれども、先生も一九四二年暮れに徴兵されます。そして、二十六歳から二十九歳までの三年間は、千葉縣市川の国府台にあった陸軍病院で、衛生二等兵として軍務に就いています。この国府台陸軍病院というのは、主に、心的外傷ストレス障害（PTSD）、いわゆる「戦争神経症」にかかった兵隊たちが入院した、その拠点の病院だったようです。」
- 国府台陸軍病院については清水寛著『日本帝国陸軍と精神障害兵士』（不二出版）第3章「国府台陸軍病院収容の精神障害兵士の概況」に詳しい。
- 41) 大塚勇三 1921年生まれ。児童文学者。翻訳家。東京帝国大学法学部卒業。1957～66平凡社勤務。リンドグレーン作品集1～7および別巻1～7（岩波書店）翻訳、絵本『スーホのしろいうま』（福音館書店）再話。他多数。
- 42) 清水寛 1936年生まれ。埼玉大学名誉教授。東京教育大学教育学部特殊教育学科大学院博士課程満期退学。
- 43) インタビュー「私と英米児童文学—瀬田貞二氏に聞く!」聞き手 吉田新一『児童文学世界』第1号、中教出版、1878年、10頁
- 44) 荒木田隆子『子どもの本のよあけ 瀬田貞二伝』福音館書店、2017年、122頁、夫婦で交互に編んだ十句は以下の通り。
- 湯屋の煙 上がるその他は 黍月夜  
余寧金之助（瀬田貞二）
- 髪梳くや 麦の穂鳴りに 雲来る  
きくよ
- 月の輪の 三重に妻解く 髪ゆたか  
余寧金之助（瀬田貞二）
- 五月雨に 誓ひし小指 小さかりき  
きくよ
- 車下りて 蕨野にみな 弾むなり  
余寧金之助（瀬田貞二）
- 鉄線花 山鳩色よ 亡父暮けし  
きくよ
- 今入港 水平地平の 夏別けて  
余寧金之助（瀬田貞二）
- 鉄線花 亡父の死語 いま聞きたしや  
きくよ
- 裸木の 囲む室あり 仕事成れよ  
余寧金之介（瀬田貞二）

川鳴りの かすかな宵の 炬燵かな  
きくよ

- 45) 余寧金之助（瀬田貞二）『郵便机』中央公論「少年少女」1949年8月号に掲載。

- 46) 中央公論「少年少女」1948年2月第一号発行。

- 47) 映画「夜間中学」

中央公論社発行の「少年少女」に掲載された余寧金之助（瀬田貞二）の『郵便机』を水木洋子が脚色し、「ゴジラ」で名を馳せた本多猪四郎が監督した。二部授業の生徒の間に交された一通の手紙をめぐる友愛の物語。主な出演者は木暮実千代、宇野重吉ら日大芸術学部出身者が協力出演していた。

- 48) 戦後の学制改革

1946年3月占領下の日本においてアメリカの第一次教育使節団調査結果をふまえ大規模な教育改革が実施された。日本側からは南原繁東京帝国大学総長等が加わり戦後の新社会に適した教育制度が検討された。教育の機会均等と義務教育の延長（6年から9年）が主な目的で、高等小学校、旧制中学校、旧制高等女学校、旧制高等学校、専門学校等が廃止となり、それぞれ新制高等学校と新制大学に組み込まれた。

1947年に新制小学校、中学校が発足。旧制中学校の募集を停止。48年新制高等学校が発足。49年新制大学が発足。年度末で旧制高校が廃止。50年度末ですべての旧制中学校が廃止。

- 49) 瀬田は戦後間もなく『児童百科事典』の構想を練っている最中『コンプトンズ・エンサイクロペディア』の「チルドレン・リテラチュア」の項目に載っていたアン・キャロル・ムーアのブックリストを見つける。

「ぼくは息を呑むほど驚いたんですね。ああこれほど充実した子どもの本があるのか、一冊一冊読んでみたいもんだと思いました。」と瀬田はのちに吉田新一のインタビューで語っている。

アン・キャロル・ムーア（Anne Carroll Moore 1871-1961）はメイン州リメリックに十人きょうだいの末娘として生まれ、1906年、ニューヨーク公共図書館に招かれ、初代児童奉仕部長に就任。以後アメリカの児童図書館運動に多くの役割を果たした。ムーアが作成した児童書ブックリストに瀬田は1949年頃出会っている。

（以上『児童文学論 瀬田貞二子どもの本の評論集』（上）、福音館書店、514頁より要約）

- 50) 斎藤惇夫 1940年新潟市生まれ。小学校一年生から高校卒業まで長岡市ですごす。長年子どもの本の編集に携わり、現在は、著作と、子どもの本

の普及活動が続ける。

著書に『グリッグの冒険』『冒険者たち』『ガンバとカワウソの冒険』『哲夫の春休み』（岩波書店）、『河童のユウタの冒険』（福音館書店）、『おいで子どもたち』（日本聖公会）、『現在子どもたちが求めているもの』『子どもと子どもの本に捧げた生涯 講演録 瀬田貞二先生について』（キッズメイト）、講演録に『わたしはなぜファンタジーに向かうのか』（教文館）などがある。

- 51) 菅原啓州 翻訳家。1943年東京生まれ。1966年東京大学法学部卒。中央公論社・福音館書店で雑誌・書籍の編集に従事。

- 52) 斎藤惇夫・菅原啓州「回想の瀬田貞二」、季刊「幻想文学」、第12号、1985年、114頁

- 53) 同上 117頁

- 54) 谷川俊太郎 詩論「世界へ!」「ユリイカ」1956年より

- 55) 谷川俊太郎

詩人。1931年生まれ。戦後の詩集の中でもっとも注目を浴びたものの一つである『二十億光年の孤独』以来、透明な思考を結晶させた詩集を次々に発表。主な詩集に『日々の地図』（読売文学賞受賞）『みみをすます』『世間知ラズ』、絵本に『こっぶ』『わたし』、日本翻訳文化賞を受賞した『マザーグースのうた』など多くの著書がある。また、『ことばあそびうた』『わらべうた』などのことばをめぐる新しい試みでは、童話や絵本のジャンルにも新機軸をうちだしている。

- 56) 谷川俊太郎・尾崎真理子『詩人なんて呼ばれて』新潮社、2017年、373～375頁、谷川俊太郎略年譜

- 57) 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社、1980年、81頁

- 58) 同上、89頁

- 59) 同上、104頁

- 60) 田中和雄

1935年東京生まれ。童話屋創業者、代表。40年間で200冊あまりの出版に関わる。『バタボン1』『バタボン2』の他、工藤直子『のはらうた』等多くの詩集、ミリオンセラー『葉っぱのフレディ』、『あたらしい憲法のはなし』等。2017年82歳にして初めての自作絵本『自分におどろく』を出版。

- 61) トム・ Shippey Tom Shippey

1943年、インドのカルカッタ生まれ。英国で教育を受ける。トールキン の最晩年にオックスフォード大学でチューターとして教え始め、1979年リーズ大学の英語・中世文学教授。1993年米国、セント・ルイス大学教授を経て現在、英国のウィンチェスター大学名誉研究員。トールキン研究の

第一人者として世界的な評価を得ている。古英語や中英語、古北欧語にも通じ、中世研究家であってファンタジー研究家であり、真の意味でトールキンの精神を受け継ぐ研究者として認められている。

- 62) トム・シッピー『J.R.R. トールキン 世紀の作家』沼田香穂里訳、評論社、2015 年、63 頁  
 63) 雑誌「子どもの館」1975 年 1 月号「夢みる人々」連載作品論第 7 回、J.R.R. トールキン『ホビットの冒険』、46～47 頁  
 64) 同上 47～48 頁  
 65) J.R.R. トールキン『ホビットの冒険』瀬田貞二訳、岩波少年文庫新版、2000 年 8 月、100 頁

第三章、旅の仲間がエルフの館にたどり着くシーン。心地よい気配が松の香りや黄昏の明るさのなかに感じられる冒頭の瀬田の翻訳のエルフの詩の後半以降は次のようになっている。

O! What are you doing,  
 やあ、そこで何をしているの?  
 And where are you going?  
 いったい、どこへいきたいの?  
 Your ponies need shoeing!  
 小馬のひづめをとりかえなさいな。  
 The river is flowing!  
 ほら、川がながれていくだろう、  
 O! tra-la-la-lally  
 トラ、ラ、ラ、ラリー  
 Here down in the vally!  
 この谷そこを!

O! What are you seeking,  
 やあ、何をさがしているの?  
 And where are you marking?  
 いったい、どこへいきたいの?  
 The faggots are reeking,  
 まきがいぶっているところ、  
 The bannocks are baking!  
 おかしがやけているところ、  
 O! tril-ril-ril-lolly!  
 トリ、リル、リル、ロリー  
 The valley is jolly!  
 谷はたのしい、  
 ha! ha!  
 ハッハッハ!

O! Where are you going  
 やあ、どこへいくつもりなの?  
 With bears all a-wagging?

みなさん、ひげをふりたてて。

No knowing, no knowing  
 What bring Mister Baggins  
 どうしてバギンズさんや、  
 And Balin and Dwalin  
 バーリン、ドワーリング、

down into the valley  
 谷をおりてきたの?  
 in June  
 いまは六月、

ha! ha!  
 ハッハッハ!

O! Will you be staying,  
 やあみなさん、おとまりですか?

O! will you be flying?  
 それともすぐにおたちですか?

Your ponies are straying!  
 小馬はすっかりつかれてる。

The daylight is dying!  
 お日さまはとうに沈んでいる。

To fly would be folly  
 おたちはおろか

To stay would be jolly  
 とまればたのしい

And listen and hark  
 われらのうたに耳を傾けて

Till the end of the dark  
 夜をおすごし、

to our tune  
 ha! ha!  
 ハッハッハ!

So they laughed and sang in the trees;  
 声は、このように木の間から笑いたいました。  
 and pretty fair nonsense I daresay you think it.  
 うきうきするようなさわざです。  
 Not that they would care; they would only laugh  
 all the more if you told them so.  
 このさわざをばかばかしいとののしっても、か  
 えってわらいとばされてしまいそう。  
 They were elves of course.  
 もちろん、その歌声の主は、エルフたちでした。  
 Soon Bilbo caught glimpses of them as the  
darkness deepened.  
 まもなくビルボも、ふかまるやみのあちこちに、  
 エルフたちをみかけるようになりました。  
 He loved elves, though he seldom met them;

but he was a little frightened of them too.

エルフというのは、妖精小人のなかでいちばん楽しい人たちで、（←本文にはない部分）ビルボはもともとエルフが好きでしたがこれまであまりあったことがなく、少し恐ろしい気もしました。

#### 66) 俳句的〈暗示〉について

ドナルド・キーンは『日本の俳句は何故世界文学なのか』で俳句的〈暗示〉について、

「暗示は日本の詩歌の一番大事なものの、必要なものの一つだと思います。暗示がなければ、十七文字、あるいは三十一文字で、自分の気持ち、自分の感想を十分に表現することはできません。」

と、述べ島崎藤村の若葉集に代表される明治以降の新体詩と俳句を比較している。

新体詩には暗示がなく、したがって外国人が新体詩から学ぶものはあまり無いと述べている。

以下キーンが俳句について三つの優れた要素を、正岡子規の俳句論を絡めて掲げている。

#### 1. 〈暗示〉

アメリカの詩人 W.S. マーウィンは非常に暗示の多い詩を作ったが、それは明らかに日本の詩歌の影響だった。アーウィンは3年間自分の詩を作らず与謝蕪村の俳句を翻訳、200 ページほどの蕪村俳句英訳集を編んだ。

こがらしや 岩に裂行 水の声

与謝蕪村

マーウィンの英訳：

In the wild winter wind  
The voice of the water cracks  
Falling across the rocks

キーン評：英訳も全然無理のない五七五。しかも頭韻があります。wild、winter、wind いずれも〈w〉という発音があり、木枯らしの猛烈な勢いを感じさせます。

#### 2. 〈写生〉

正岡子規は蕪村の写生を賞賛した。

牡丹散りて 打かさなりぬ 二三片

与謝蕪村

正岡子規評：子規は蕪村の俳句の中で写生の句を褒めました。写生俳句は、ある景色を観察した際の詩人の感情を描くものではないし、またその景色が蘇らせる思い出を描くものではなくて、観察した対象そのものを描くのだ。詩人は見た対象を正確に伝えれば伝えるほど、その詩は良くなるのだ。

#### 3. 〈音〉

更にキーンは俳句の「音」の美しさを強調している。

春の海 終日のたり のたりかな

与謝蕪村

キーン評：「のたりのたり」という音だけで海、春の海を感じさせる。

閑さや 岩にしみ入る 蟬の声

松尾芭蕉

キーン評：「いいわにい しいいいいる せみいのこえ」の「い、い、い、い、……」は蟬の鳴き声。

夏草や 兵どもが 夢の跡

松尾芭蕉

キーン評：「つわもおのおのおもおが ゆめのおあとお」繰り返されるのは「お」という悲劇的な音です。

このような音の使い方は芭蕉にも蕪村にもある。

- 67) ハーバート・リードは瀬田が『幼い子の文学』でもその言葉〈Magic and Music〉を取り上げているほどで、おそらく瀬田はその著書から様々な示唆を得ていたのではないと思われる。昭和32(1957)年「萬緑」10月号「俳句の音量感」と題する座談会で瀬田は芥川龍之介の一句「青蛙お前もペンキ塗らたてか」がルナール博物誌から引いている一句だとして、「詩としての収穫をあくまでつかまえて、俳句で出す」という風に、俳句を世界標準の詩の一形式として捉えようとしている。瀬田は俳句をととして詩文学全体を俯瞰し、草田男の童話から詩文学を論じるという、瀬田独特のものの捉え方を示している。ここには戸谷陽子が述べるポストモダン、意味と意味をつなぐ「ルネッサンス人」の考え方が息づいている。

- 68) ハーバート・リード『詩についての八章』田中幸穂訳 みすず書房、1956年、22-23頁

- 69) ポール・ホーケン「イマジン—未来への想像力」



坂本龍一『非戦』幻冬舎、2002 年

- 70) 島蘭進『現代宗教とスピリチュアリティ』現代社会学ライブラリー 8、光文堂、2012 年、66 頁
- 71) J.R.R. トールキン『妖精物語について ファンタジーの世界』、猪熊葉子訳、評論社、2003 年
- 72) トム・シッピー『J.R.R. トールキン 世紀の作家』沼田香穂里訳、評論社、2015 年、34-35 頁
- 73) 瀬田貞二『幼い子の文学』中公新書、1980 年、121 頁
- 74) Bells and Grass “A book of Rhymes”、1941 年
- 75) 瀬田貞二『幼い子の文学』中公新書、1980 年、119-121 頁